

台湾のクラシック音楽事情

人口比で多いオーケストラ

取材・文＝山田真一
Text＝Shinichi Yamada

台湾といえば、近未来的な姿形をした劇場ホールが次々と建設中。まともな市民芸術館などを手掛けた建築家・伊東豊雄氏がすすめている「台中国立歌劇院」やオランダの設計事務所が進めている「台北パフォーミング・アーツ・センター」など、話題に事欠かない。では、オーケストラはどうか。現地での活動や団員の構成など、なかなか知る機会が限られているオーケストラ事情についてを中心に明らかにしていこう。

日本では一般に台湾のオーケストラ情報に耳にすることは少ない。その理由の一つが、中国との関係にあると情報筋は言う。文化交流が国の体裁と係わりと、文化の役割を考えると残念なことだが、欧米と違ってアジアのオーケストラ来日には公的支援の必要性が多いことを考えると、そうした背景もさもありなんと思っ。

それだけに現地で見聞したオーケストラ

ラやクラシック音楽事情は非常に新鮮で興味深いものばかりだ。台湾にはメジャーなオーケストラが6、8程度ある。プロとして活動するオーケストラはもう少しあるのだが、音楽的内容を考えると、そのくらいというのが現地の捉え方らしい。もともと、人口が日本の二割以下なことを考えると十分以上に多いだろう。多くは人口700万程度の台北首都圏に集中している。マエストロ・リュウ

率いるフィルハーモニア台湾(国家交響楽団)は全額国家支援の名実共に国立オーケストラだ。拠点は、国立ホールの国家音楽庁と実に通じた環境にある。リハーサルから本公演、録音まですべてホールで行える。ホールは2000席を超える客席にパイプオルガンを備える。設立は1986年。音響もなかなか良い。他に小ホールもあり、連日様々なコンサートが開かれている。外来アーティスト

も日本でもよく見かけるトップ・アーティストが多い。また、隣には双子の施設の国家歌劇院があり、こちらではオペラ上演も行われる。これらの施設にあれば、ライブのクラシック音楽体験には事欠かない。街中なので交通の便も良い。オーケストラでは他に、台北市立交響楽団、台北フィルハーモニー、それにエヴァグリーン(長榮)交響楽団などがある。いずれも、海外公演を何度もしてい



国家音楽庁 写真提供＝国家交響楽団



中山堂 ©Shin Yamada



松山文創園區 ©Shin Yamada

る。エヴァー響はエヴァー航空も持つ長榮グループによって設立された比較的新しいオーケで、過去ラ・フォル・ジュルネに数回出演している。その他、台中には最も古い、日本統治時代からの流れを汲む台湾国立交響楽団、高雄には高雄市交響楽団と、各地にオーケストラが存在する。

トリの基本をしっかりと身につけている。専科の音大がないが、教育大や総合大学に音楽学部が設置され、マスタークラスには海外のアーティストも積極的に招聘しているという。

裾野の広い聴衆

コンサート会場に行くと何より興味深かったのは聴衆の反応が実に良いことだ。他のアジアの国々へ行くと、聴衆の

社会階層が見るからに偏っていたり、動員が掛けられたと思われるものも見られ、それが台湾では感じられない。曲も、音楽の質もよくわかっていて聴衆が自分でチケットを買ってやってくる。簡単にいえば日本と変わらない光景がある。

その辺りの事情を現地で聞くと、戦前の音楽事情にまで遡ることができ、戦後は日本と同じように名曲喫茶が街のあち

こちででき、レコードやCDが多く売れたという、これもまた日本と同じような流れだ。音楽やシアは今でもLPを買い求め、そういう客相手のショップも存在する。

フィルハーモニア台湾を初めとして、各オーケストラは現代曲、中華系、台湾人の作品演奏にも積極的だ。そうした作品がまた、聴衆にも受け入れられ、興味を持たれている。開演公演でも若手作曲家の林京美の《舞詠曙光》が委嘱作品として初演され、公演前の作曲家を交えたトークでも多くの聴衆が集まっていた。

このように良き聴衆が多く存在する台湾だが、「さらに聴衆を増やそうとアウトリチ活動や企業向けの取り組みにも盛んに取り組んでいる」とフィルハーモニア台湾のジョイス・チュウ事務局長は話す。

もともと台湾のクラシック関係者にも悩みはいろいろある。その最大のもは、演奏会場の少なさだという。国立のホールと劇場は特別な存在。大きな会場としては、戦前日本が建設した多目的の「中山堂」が現在でも大事に使われている。趣があつて映画撮影場所にもなる建物だが、この二つを除くとほとんどないのが実情だ。日本のように首都圏でさえ、各自治体がホールを作ってしまったのは相当異なる。最近、戦前からの古いタバコ工場跡を再利用して「松山文創園區」という文化地区を整備している。この中に小ホールがあり、アンサンブル会場として重宝されている。松山文創園區は、今どきの都市部住民が集うオシャレな場所として賑わっている。

今後の台湾のクラシック活動にも注目だ。

ensemble

フィルハーモニア台湾音楽監督

リュウ・シャオチャ



写真提供＝国家交響楽団

台湾というオーケストラをご存じだろうか。1986年台北に設立された台湾を代表するオーケストラ。中華名は國家交響樂團なのだが、国外に出るときには現在の名称を使っている。名称から想像されるように国の全面的支援のもと、国立音楽ホールの中正文化中心を本拠地に活動している。今シーズンのオープニング、9月のマラー「交響曲第9番」を現地で聴いたが、これが非常にうまいことに驚いた。同じアジアのオーケストラといっても、日本のオーケストラとは全く傾向が違う。どちらかという、アメリカのオーケストラのような音の厚みを感じる。そこで、リュウ音楽監督にオーケストラの特徴とその音の秘密を聞いてみた。

「欧米で教育を受けた楽員の数は……おそらく半数がそうですね。生まれはほぼ台湾の音ですが、国内で音楽教育を受けた後、欧米でさらに高等教育を受けた者は確かに多いです。一方、外国人は僅か5人ほどです。木管や金管に少し……弦楽部は生粋の台湾人の集団ですよ」

今筆者も台湾のクラシック音楽事情を取材して初めて知ったことが多いが、クラシック音楽の受容は日本の影響を受けて、戦後、多くのレコードファンから始まり、かなり裾野が広い。一方、音楽教育も中華系らしく家庭単位で熱心な例が多く、この辺りも日本に近い。同じ中華圏の中国大陸や香港とはかなり様相が異なる。

「このオーケストラは、ここ数年で驚くほど進化しました。土台をしっかり作ったところに前任のギンター・ヘルビヒが、シンフォニックな音楽演奏の基礎をみっちり仕込みました。ですから、私が着任した5年前にすでに大曲を演奏できる状態にあった。昨シーズンから今年半ばまでの1年余だけでも、《トゥーランガリラ交響曲》、《グレの歌》、マラーの交響曲、ブルックナーの交響曲、シュトラウスの管弦楽曲を毎回のよう定期公演で取り上げられるまでに成長しています」

これは驚異的なプログラムだ。しかも、彼が振らない時でも、シヨスタコーヴィチ、シベリウスといった大シンフォニーがプログラムを飾る。日本のオーケでもこんなプログラムを続けることは大変だろう。リュウは長らくウィーンで勉強し、プザンソン・コンクール、コンドラシン・コンクールで優勝し、コブレンツやハノーファーの歌劇場音楽監督を歴任し、ミュンヘン・フィルやフランス国立管にも客演している才人だ。

「伝統が世代間で受け渡しができるように、異なる国や文化背景を持つ者たちの間でも受け渡しはできる筈です。そして今、アジアでもクラシック音楽をこのように解釈できる、演奏できると欧米に向かって発信する、そういう自信を持っていい段階に来たと感じます。楽員もそういう自信を持って、欧州ツアーでも演奏している。その良い反応がさらなる自信に繋がっています」

3年前の2012年11月に来日したが、この2年ほどでもオーケストラはかなり進化したと感じる。「古い録音は参考にしないで下さい」というだけに、成長著しく、勢いのあるフィルハーモニア台湾の新たなサウンドを、早く日本でも再び聴きたいものだ。

SOUND

本樂季開季音樂會—9月馬勒第九號交響曲，
在現場聆聽後非常驚艷。以同樣身為亞洲地區
的交響樂團來說，與日本的交響樂團整體的風
格不同。總體而言，感覺是那種如美國交響樂
團有深度的聲音。

音樂之友社

2014 09 20 «馬勒第九»